



市制施行50周年記念

合併から50年⑥
住道駅と鐘紡



寝屋川と恩智川が合流する住道駅周辺。

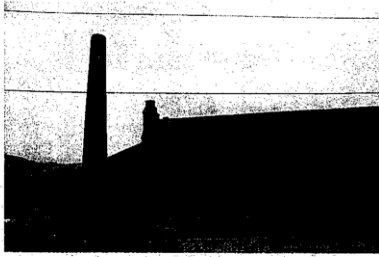
二つの河川が合流する当地は、江戸時代のころから、大東市域と大阪を結ぶ寝屋川舟運の中心地として栄えており、これらの船着場があったのが、角ノ堂(すみのどう)浜でした。明治28年の浪速鉄道の開通と共に、住道駅が開設されたのも、当地が古来より、交通の要衝であったからです。

住道駅周辺で忘れてはならないのは、駅の南側にあった鐘紡住道工場です。「鐘紡(カネボウ)」と呼んでいますが、正式な名称は鐘ヶ淵紡績株式会社です。鉄道開通と同じ年の明治28年に、摂河紡績株式会社工場の誕生、その後、明治32年に同社から譲渡され、鐘紡住道工場となりました。昭和8年から拡張に次ぐ拡張で、昭和10年には従業員数が最大となり、戦後の昭和26年から30年ごろが生産のピークであったと言われています。工場の敷地は広大で、現在、ベルパーク住道マニション、総合福祉センター、総合文化センター、消防本部、都市再生機構住道駅前住宅が建つ場所は、すべて工場の敷地内です。また、住道駅から

工場への引き込み線も敷かれました。

大東市域に色々な面で繁栄をもたらした鐘紡ですが、化学繊維の普及などにより、昭和50年にその76年の歴史の幕を閉じています。

鐘紡の名残は、今も見る事が出来ます。新町では、工場の塀の一部と門灯が残っていて、栄町公民館の土地は、鐘紡から寄贈されたもので、それを示す記念碑が残っています。また、工場内に植えられていたワシントンヤシの一部が、都市再生機構住道住宅の中に植えられていましたが、近年伐採されました。



鐘紡住道工場



市制施行50周年記念

(最終回)

合併から50年
大東水害と
住道駅前の再開発



大東市が発足した当時の古い写真を見ると、当時の寝屋川や恩智川の堤防は土手のままで、川のすぐそばまで行くことが出来ました。川の水も奇麗で、魚もたくさん泳いでおり、土老の話によると、川で洗濯出来るほどでした。また、JR住道駅付近の寝屋川と恩智川が合流する辺りには中ノ島と呼ばれる中洲があり、駅へ行くには橋を二つ渡らなければなりませんでした。

このようなどかな風景が、一変したのは、昭和47年に起こった2度の水害後のことです。1度目は7月、集中豪雨により河川があふれ洪水の被害がありました。2度目は、それから2カ月もたたないうちに、台風20号による水害に見舞われました。

この水害以降、河川や水路の改修が行われ、現在のような川を見ることが出来ない高い護岸が築かれ、昔ながらの風景が失われてしまいました。

翌年の昭和48年には、JR住道駅周辺の再開発が始まりました。この開発により、水害を防ぐため

寝屋川の川幅を広げる際に、中ノ島は取り除かれ、現在の姿になりました。

一方、駅の南側は府営住宅の高層化に伴い整備されてきて、昨年は市民の憩いの場所として末広公園(住道駅前公園)が完成しました。また、生涯学習センター「アークロス」がオープンするなど、大東市の新しい顔になりつつあります。

4月で大東市は51年目の新しい歴史の一步を踏み出しました。50年後の大東市は、住みよい街、歴史と文化の香る街、安心して暮らせる街に発展していることでしょう。



昭和30年代頃の寝屋川(灰塚付近)